

ほくと遺跡ものがたり 第11回

遺跡が語る北斗の歴史

はるかむかし、旧石器時代・縄文時代から現代に至るまで、一万有余年の間にこの北斗の地で営まれ続けた人類の歩み―「コーナー」では、こうした北斗の歴史について、「遺跡」に焦点をあてて紹介します。今回は前回に引き続き、北斗市に数多くのこる箱館戦争にまつわる遺跡や記録について触れていきたいと思います。

今回は、長く続いた武士の時代から新しい時代へと移り変わる中で起きた最後の戦いである箱館戦争に至る経緯とその開戦前夜までお話ししました。今回はそれに続き、箱館戦争の勃発、そして北斗市地域で戦われたその緒戦かつ最初の大規模戦闘である「大野口の戦い」(通称・意富比神社の戦い)について紹介します。

なお、「大野口の戦い」については、3年前より当館において旧幕府側16・新政府側19の合計35の当時資料から情報を抽出・整理・分析することにより、当時の戦いの詳細を探る研究を行っています。今回お話しする内容はそれに基づきますので、おそらく今まで「意富比神社の戦い」として聞いたことがあるお話と大分違うところがあると思います。

新たな資料の発見や研究成果により今までわからなかった部分が埋められ、その結果かつての説が訂正されることは歴史を研究する上ではつきものです。

また、それぞれの情報が当時の記録に基づいた確認(考証)がなされないまま、そして情報の出所が不明なまま伝言リレーのように伝えられていくと、いつしか本来の姿から変わってしまっていくことも「読み物としての歴史」がたびたび陥りがちな落とし穴です。

こうしたことを踏まえ、常に知見を広め研究を絶やさず、折々にその内容を較正(正しい方向に直すこと)し続けていくことは、地域の歴史を伝えていくうえでとても大切なことです。今回のお話は、そういった取組の一例になります。



図・箱館戦争開戦～大野口の戦い直前までの戦線戦況図

陸、本多幸七郎・人見勝太郎らに蝦夷地滞在開拓の嘆願書を託し箱館府知事・清水谷公考の元へと送り出します。

しかしその願いもむなし、箱館府は旧幕府軍の迎撃をすでに決定していました。当時の箱館府の兵力は常備兵力である在任隊・新兵隊、かねてより有事の際は戸切地陣屋からの部隊の供出を約束していた松前藩(このためこの時戸切地陣屋はほぼ空の状態でした)、援軍として17日に到着した弘前藩、20日に到着した

大野藩(現・福井県)・福山藩(現・広島県)の合わせて約1300名でした。

このうち大野に駐屯していた箱館府兵・松前藩兵・弘前藩兵約200名は22日の奇襲を決め藤山村(現・七飯町藤城)まで移動。同日未明、隣接する峠下村(現・七飯町峠下)まで歩を進めていた旧幕府軍使者らに対し夜襲をしかけます(峠下の戦い)。これが、この後約半年間に渡る箱館戦争の幕開けでした。

この新政府側諸藩隊の夜襲は、使者ら

に続いて大川正次郎・滝川充太郎らが率いる伝習隊主力が到着していたこともありあえなく撃退。敗れた新政府側は藤山村まで後退、さらに翌23日には旧幕府軍の追撃を受け後方の七重村（現・七飯町本町）まで後退します（以降この松前藩兵は箱館府兵と行動を共にし戸切地陣屋に戻ることはありませんでした）。加えて大野村の残存兵力も後方の有川（現・北斗市中央）まで後退してしまいます。

この事態を受け箱館府は同日、大野口・七重口（「〽口」は「〽方面」を指す当時の表現です）二方面での迎撃を決定。箱館山麓沿岸を守っていた大野・福山の両藩にも援兵を要請します。これを受けまず福山藩兵一小隊が移動を開始。途中有川村で21日の到着以降そこで停滞していた松前藩の鎗剣隊約50名を発見、彼らを促し共に大野村へ到着しています。同日午後4時までには大野藩も到着。方面指揮官（総督）は不在でしたが、ひとまず三藩で合議し翌24日早朝2時に峠下村へ夜襲をかけることを決めます。

それと丁度同じ頃、ようやく箱館府は大野口の総督を福山藩の岡田伊右衛門に命じ、これを受け岡田は五稜郭から大野村へ向け急ぎ移動を始めます。

一方大野村では日付が変わるあたりから徐々に「旧幕府軍が逆に夜襲をしかけてくる」との噂が広まり始め、これによ

り村内は激しく動揺します。巡回を強化するなどの対策もむなしく、もはや予定の夜襲の時刻になっても事態は収まらず、午前2時頃、新政府側諸藩隊はひとまず大野村の南隣・千代田村（現・北斗市千代田）まで後退することを決めます。

その後夜襲が来ないことを確かめて大野村に彼らが戻ったのは午前3時半〜4時頃になってからでした。つまり彼らは虚報に右往左往しながら一睡もできずに24日の朝を迎えることになった訳です。

一方この間、旧幕府軍は23日のうちに翌朝の進撃を決して以降はそれに備え休養しており、一切動いていません。

混乱の夜を過ごした大野村に夜を徹して駆けた総督・岡田が到着し、ようやく総員での軍議を開始できたのは早晩6時のことでした。そうして改めて全隊での進撃に方針を決した朝7時、本陣に「一ノ渡（現・北斗市市渡）村境に旧幕府軍来襲す」の急報がもたらされます。

時間はやや遅り朝6時ごろ、大野村本陣から二十町（約2.2キロメートル）北の一ノ渡村内（現・市渡大野新道交差点付近）まで偵察に出ている大野藩斥候が、接近する旧幕府軍を確認。大野の本陣へと伝令を走らせるとともに、自らの迎撃拠点を採した後退し、「二・三丁（約33

0メートル）ほど戻ったところで「氏神八幡宮」を見つけ、彼らはここでの防戦を決めます（以上『箱館戦争実記』より）。

この「八幡宮」ですが、長らくこれが意富比神社であると考えられてきました。

しかし、記録が書く通りの道筋をたどると、彼らが拠ったのは位置的に見て現在の市渡稻荷神社であることがわかります。なお同社は、旧大野地域で唯一歴史上「八幡宮」として記録がのこる神社でもあります（『松前下蝦夷地紀行』1805年）。

前夜十分な休養を取った旧幕府軍は、路面凍る寒さの中大島圭介率いる伝習隊が万全の体制で進軍。このとき大島は部隊を自らの本隊と本多・大川・滝川らが率いる分隊とに分けていますが、これは隊同士で巧みに連携し、ライフルの長射程・高威力を活かした挟撃による十字砲火で敵を一方向的に殲滅可能な、洋式軍学に長けた彼らならではの部隊編成でした。

この戦術により、まず「八幡宮」に陣した大野藩兵・援軍に來た松前藩兵は三方からの「彈丸降ル事雨ヨリモ甚シ」（『箱館戦争実記』）という激しい砲火になす術なく敗退・退却。次いで福山藩兵が救援に來るもまた「左右ヨリ逼迫」（『阿部正恒家記』）する十字砲火の前になす術なく後退（この時意富比神社付近までさがつ

た可能性はあります）。最後は文月側から迂回してきた滝川隊の「既二後ヲ断タントスルノ勢」（『阿部正恒家記』）の前についに戦線は完全に崩壊。新政府軍側諸藩隊は途上「敵の砲撃に利することになる」と千代田村・一本木村の家々に火を放ちながら久根別・有川へと逃走します（こうした戦闘経過を見るに、かつて「意富比神社の戦い」と呼ばれた戦いは、その実一ノ渡から本郷・大野村全域を舞台とした戦闘であることから、当時この方面一体を指し史書にもある語をとり「大野口の戦い」と呼ぶのが適当でしょう）。

戦闘時間わずか1時間余り（『南柯紀行』『土井利恒家記』）。旧幕府軍側の戦死1名・負傷3名に対し、新政府側の戦死21名・負傷7名・生死不明8名。戦闘と呼ぶにはあまりに一方的なこの差は、たとえば松前藩鎗剣隊のような旧時代の部隊と、諸外国に並ばんと洋式軍学を学びその運用に習熟した伝習隊らとの差でもあったでしょう。もはやこの時代の戦闘に、剣術・槍術・和式砲術など旧武術の活躍の場は存在しなかつたのです。

なお、この後周辺の鎮撫に出た部隊の接近を見て、残りごくわずかな守備隊は戸切地陣屋を自焼し撤退しています。次回は箱館戦争の狭間、1年目と2年目の間の出来事についてご紹介したいと思います。（郷土資料館 時田 太郎）